

薩摩塔基壇部における尊像群について

水野 さや

The View about the Statues on the Base of Satsuma-tō

MIZUNO Saya

はじめに

鹿児島県、福岡県、佐賀県、長崎県には、いわゆる「薩摩塔」と称される石塔が現存する。また、近年、大阪府堺市で新たに薩摩塔形式の石塔（塔身部のみ）一基が報告され、堺市博物館において展示されたことも記憶に新しい²。

薩摩塔は、須弥壇を象る基壇に壺形（ないし宝珠形）の塔身を戴き、その上部に屋蓋を載せ、相輪（ないし宝珠のみ）を戴くことを一つの類型とする。基壇上部に高欄を伴い、下部には花頭形ないし雲頭形の削りのある脚部を持つものもある。屋蓋は木造建築の屋根材や瓦を模しており、塔身には龕を設け、その中に如来坐像³を浮彫する。基壇部は六角平面ないし方形であり、その中台に神将形像などが浮彫される。

薩摩塔の研究史については、高津孝・橋口亘「薩摩塔小考」、高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究（続）」、井形進「薩摩塔の研究序説」などに詳しい⁴。これまでの主な研究観点は、薩摩塔の形式分類⁵、薩摩塔に表される尊像の画像分析⁶、石材の産地分析⁷に集約されよう。特に石材の科学分析により、薩摩塔の用材がほぼ梅園石（浙江省寧波郊外の梅園郷産の石材）と認定可能であると判定されるなどの成果が上げられ、関連する礎石や宋風獅子の石材研究の成果⁸。

を含め、薩摩塔の石材は中国産であることがほぼ確定した感がある。また、薩摩塔に類する中国の石塔についての言及もなされている⁹。以前はその制作地について中国、琉球、九州までの諸説があり、制作年代も平安時代後期から室町時代まで想定されていた薩摩塔であるが、現在は以上のように、中国の寧波周辺で制作されたものが日本に持ち運ばれたものであり、その制作や渡来の時期は一三世紀から一四世紀の前半頃であるという見解で落ち着きつつある。

尊像の画像分析において、井形進は薩摩塔各部の浮彫尊像に関する見解をまとめ、塔身の坐形の尊像には「如来形」・「僧形」・「如来のようであるもの」の少なくとも三種類があるとみる¹⁰。井形によれば、「如来形」は普照王仏、弥勒如来の可能性を指摘する。「僧形」は、延久四年（一〇七二）に著された成尋『參天台五台山記』において、肥前呼子の壁島（加部島）からの船出の際、風待ちの間、海商が神銭と神幡を焼き祭文を読んで「諸神」を祭っていること、そして、大陸眼前の島々に至った際、東茄山で船人が参拝する山頂に泗州大師堂があることを記すことから、この僧形は泗州大師僧伽と解釈する。「如来のようであるもの」は僧伽、ないし戒寛の『渡宋記』に博多津から船出の風待ちにおいて風伯を祭ったという記述から風伯、ないし先の『參天台五台山記』の「諸神」の可能性を述べている。その結果、井形は、いわゆる薩摩塔が、特定の尊像

への信仰と一対一で結び付いた存在ではないことを指摘する¹¹⁾。

鹿児島県内の薩摩塔およびその関連資料の調査に最前線であり、多くの成果を発表している橋口巨による論著¹²⁾においても、薩摩塔を信仰していた主体は日本人ではなく、海上貿易に関わる中国人海商であったこと、薩摩塔のある場所が、彼らの居留地ないし彼らと結び付きの強い重要な場所（海の近く、海が望める霊山、水運に欠かせない川沿い、その川を遡った場所など）であるとする。このように薩摩塔は、特定の尊像ではなく、海商という特定の集団の信仰と結び付いたものと理解されている。

一・薩摩塔をめぐる本論の視座

薩摩塔に見られる特徴は、国内の中世石造建造物において¹³⁾、層塔形式、多宝塔形式、宝篋印塔形式、五輪塔形式、無縫塔形式などの石塔のいずれとも完全に一致するものはないが、木造建築を模した屋蓋（多宝塔形式・京都・清涼寺宝塔、鎌倉前期など）、花頭形ないし雲形の削りのある脚部（無縫塔形式・京都・泉涌寺開山塔、鎌倉〔一三世紀中頃〕など）、塔身（五輪塔では水輪ないし地輪部）の如来像（五輪塔形式・神奈川・元箱根伝虎御前・曾我兄弟塔、永仁三年〔一二九五〕など。宝篋印塔形式・茨城・宝鏡山塔、文応元年〔一二六〇〕頃など）、五輪塔形式において見られる肩がやや角張った壺形ないし鉢形の水輪（千葉・福楽寺塔、文安四年〔一四四七〕など）、または上下にやや伸びる卵形水輪（奈良・当麻北墓塔、平安末、熊本・西安寺跡塔、正嘉元年〔一二五七〕など）のように、薩摩塔を構成している要素を個々に見れば、類似する特徴を探すことも可能かもしれない。

一方、基壇が神将形像などによって荘厳される薩摩塔の特徴は、日本国内の他の石塔とは異なる点として大いに着目され、筆者に

とつては、統一新羅、高麗、遼、金の塔がすぐさま想起される。もちろん、薩摩塔との関係において、先学の指摘する石塔（福建省泉州市・開元寺石塔、浙江省麗水市・靈鷲寺石塔など）の存在、京都・大徳寺の五百羅漢図のうち「卵塔湧出図」に関連する形式の塔が描かれている¹⁴⁾ことから、浙江省の浙東と浙南の沿岸地域に集中して存在する「窠塔波式石塔」¹⁵⁾を薩摩塔の源流と見なす見解に異論を述べようとすることはできない。ただ、統一新羅、高麗、遼、金の石塔・博塔を眺めてきた眼を以て薩摩塔を見ると、その先にあるのが中国の一地域に留まらない、より広汎な視野で俯瞰できはしないのか、そうした観点を提示できればと考えている。

先述のように、近年までの研究により、薩摩塔の石材原産地、造立背景、制作年代、制作地についての大きな成果が上げられているが、それでもなお、中国に一致する類例が認められないことは、やはり気になる点である。

また、薩摩塔に刻銘がほぼないことも考えなければならぬであろう。志々伎神社中宮所在の六角薩摩塔部材に「大寶□／真高為現世安穩／後生善處奉納／志自汶峯／元□三□□八月□／敬白」／（は行変え）の銘文がこれまでの唯一であり、元亨三年（一三三三）の可能性が指摘されている¹⁶⁾。ただし剥落によって形成されたと推定される凹部に「志」字の上部が刻まれており、後刻の可能性も考慮する必要がある。また、志々伎の「志自汶」からして、刻銘は日本で行われたものであろう。それでは、彫刻そのものは中国で、日本への搬出前に行われたのであろうか。材料を輸入し、加工は受け入れ先の現地で、ということもあろう。すなわち、石材が中国浙江省産だとしても、即、彫刻の施された場所とはならない。粗彫した状態で持ち運び、納入された現地で最終的に仕上げをするということも想定できよう。そうであるならば、制作地を考察するには、彫刻に

用いられた鑿を検証することも有効であろう。

また、薩摩塔の性格を特定するために、尊像の図像の検証も必要となってくる。もちろん、井形進などの先行研究により、薩摩塔の彫刻に関する言及も行われている。基壇部の神将像について井形は、「薄く巧みな浮彫表現を見せ大人の風格をもったものから、厚みを増しながら親しみを増し、やがては厚薄にかかわらず、小型のものとはとくに平板で硬いものが目立つ」ようになり、「像容や尊像構成については、新しいものになるほど、剣ないし刀を地面に突き立てる作例が複数存在するなど、一組の中での像容の近似ないし重なりが見られたりと、単調化とも言える傾向が看取できる」が、「韋駄天のような姿をした像が登場」するなど、「総じて見ると尊像の種類が増加する」と指摘する¹⁷⁾。

確かに、神将像には、龍福寺跡六角薩摩塔基壇部材（長崎県大村市）のように平板な浮彫、志々伎神社沖津宮薩摩塔（長崎県平戸市平戸島、図2-1・2）や興徳寺六角薩摩塔基壇部材（福岡県福岡市西区姪の浜、図3-1・2）のように高浮彫のもの、その中間ほどの毘沙門寺六角薩摩塔基壇部材（長崎県佐世保市宇久島）や首羅山遺跡薩摩塔（西塔）（福岡県久山町、図7-1・3）のような作例があるが、浮彫の厚・薄が制作年代に準じているとは思われない。これは、制作地（工房の作風）に関わる点であろう。例えば、首羅山遺跡薩摩塔（東塔）（福岡県久山町、図8）と太宰府市個人蔵薩摩塔（九州歴史資料館保管）、宇美町個人蔵薩摩塔（福岡県宇美町、図14）と火焰塚薩摩塔方形基壇部材（福岡県福岡市東区志賀島、図13）は、彫りがかなり近似している。宇美町個人蔵と火焰塚のように同じ服制を見せるなどの像容の共通点もあるものの、神将像四軀の組み合わせと配置が異なっていること（獅子冠を被る像の有無など）は、逆に興味深い。

さらに井形は、それらの神将像（四天王像）は、日本の四天王像と

も、そしてその図像との関連が強い『陀羅尼集経』や、『般若守護十六善神王形体』などに説く図像とも、そのまま一致するものではなく¹⁸⁾、さらに、黒髪山西光密寺薩摩塔（佐賀県武雄市、図6-1）のように（井形によれば）「帝釈天」（図6-2）が含まれ、塔を掲げる多聞天が不在であること、火焰塚薩摩塔のように「古式な四天王」（着甲形式ではない四天王像）が見られること、四軀のうちの一尊が雲上に立つことなども注目点として指摘する¹⁹⁾。

以下本論では、先行研究を踏まえつつ、薩摩塔の基壇部中台に浮彫される尊像についてあらためて整理を行い、その配置と特徴をまとめ、そこからうかがえる試論を述べてみたい。

二・基壇部中台に表される尊像の配置と特徴

(一) 配置

【表1】から【表4】は、主な薩摩塔の基壇部の尊像についてまとめたものである。【表1】は六角基壇を有するもので、塔身（仏龕を表す部分）を伴うもの、【表2】は六角基壇部材のみで現存するもの、【表3】は方形基壇を有するもので、塔身を伴うもの、【表4】は方形基壇部材のみで現存するものである。塔身に仏龕が表される面、すなわち正面をA面とし、六角基壇であれば、そこから時計回りにB面・C面・D面・E面・F面とする。方形基壇の場合も同様に、仏龕面をA面とし、以下時計回りにB面・C面・D面とした。各面の方向は、例えば宝塔を掲げる毘沙門天（北方）や金剛杵を執る持国天（東方）など、配される方向が明らかかな尊像が認められるものは、その像を基準に、他面の配置も当てはめた。ただし、太宰府市個人蔵（九州歴史資料館保管）のように、全体が一材より彫出される比較的小型のものとは異なり、首羅山遺跡（西塔）（図7-1）・（東塔）（図8）のように、塔身部と基壇部が別材で構成される大型のものは、

本来の構成とは面がずれている可能性もあろう。

また、神将像を、着甲神将形とそうでないものと区分した。着甲神将形とは、胸甲、肩甲、籠手、腰甲、脛当など一式を着けて杵を履くなど、上半身・下半身ともに着甲する神将像を指す。先の火焰塚薩摩塔基壇部材のように、大袖衣を身に着ける上半身に着甲しない神将像と区別している。

また、塔身を欠いており、神将像を表す部材のみ現存する作例においても、配される方角がほぼ確定される尊像（北・毘沙門天）を基準とし、他面の配置も当てはめた。そのため、「表2」と「表4」におけるAからFの各面は、あくまでも整理上の記号であり、A面は塔の正面ではない。例えば、志々伎神社中宮所在の方形薩摩塔基壇部材（その2）（長崎県平戸市平戸島、図12-1・2）は、海寺跡旧在薩摩塔（その1）（長崎県平戸市田平町里田原歴史民俗資料館、図11-1・2）に準ずれば、雲を表すD面が背面となる可能性がある。

このように、一応の配置を定めることができる作例において認められた「正面」となる尊像は、虎御前供養塔（鹿児島県南九州市）、安満岳山頂付近白山神社後方の薩摩塔（その1）（長崎県平戸市平戸島、図5）、志々伎神社中宮所在薩摩塔基壇部材（その2）（図12-1）のように、頭頂に飾り、両側に吹返が付いた兜を被る着甲神将形で、合掌して宝棒を水平に掲げる韋駄天である場合がある。また、平戸市生月町博物館・島の館（長崎県平戸市生月島、図9）や太宰府市個人蔵（九州歴史資料館保管）では宝棒は表現されていないものの、兜と合掌の組み合わせから、比較的小型の作例という点を考慮し、持物を省略して表した韋駄天ではないかと考えられる。韋駄天は、単独像では東方に配されることが多いが、増長天の八将を構成する一尊としては南方、密教系の護法二十天のうちの一尊としては西方に位置付けられることもある。このように、韋駄天だけでは正面の方角を決定しづらい。

また、志々伎神社沖津宮所在の薩摩塔（図2-1・2）、弓の馬場・茶山会館将軍地蔵尊の薩摩塔（福岡県福岡市城南区、図4-1・2）のように、背面に毘沙門天（北）が配置されることから、正面は南となるものがある。実見はできていないが、加世田川畑個人宅の薩摩塔（鹿児島県南さつま市）²⁰も同様である。

他にも、太宰府市個人蔵薩摩塔のように、毘沙門天（北）が正面の左側に来ることから、東が正面と推測されるもの、平戸市生月町博物館・島の館の薩摩塔（図9）や伝宝光院跡旧在薩摩塔（鹿児島県南九州市・ミュージアム知覧）のように、毘沙門天の可能性が尊像が正面右側に来ることから、西が正面と推測されるものがある。伝一条院跡旧在（鹿児島県南さつま市・坊津歴史資料センター輝津館）のように、左手は左肩上に挙げて宝塔（火炎宝珠にも見える）を掲げる毘沙門天の可能性が尊像が正面に来ることから、北が正面と推測されるものもある。

なお、塔身の如来像を見ると、智拳印、定印、弥陀定印、定印を結び掌上に持物（葉壺ないし舍利容器か？）を載せる（図1-2）、合掌印、拱手し袖先で手を隠すなどが認められるが、塔身部・基壇部が一材ではないこともあり、塔身の尊像から方角を確定することも難しい。ただ、塔身の如来坐像の手印の中では、首羅山遺跡（西塔）塔身の如来坐像（図7-2）がいわゆる大足系左拳印を結んでおり、これは中国において一二世紀から認められることから²¹、年代の上限を示す材料とはなろう。

以上のように、基壇部正面の尊像が一定しておらず、方角も一定ではないことから、いわゆる薩摩塔は、特定の儀軌に基づいて建立・造像されたものではないことになる。換言すれば、「その場」（受容者）の要望により、臨機応変に対応可能な状況下において制作されたもの、ないしは、安置される立地・目的により左右されること

が大きかったと思われる。

(二) 図像的特徴

薩摩塔の神将像に認められる兜としては、韋駄天の他にもそれと同形の兜を被る像もある。その他には、円筒形宝冠を被るもの、三山か三弁に区切りが認められる冠を被るもの、獅子冠を被るもの(首羅山遺跡〔東塔〕、太宰府個人蔵・南、安満岳〔その2〕・西)もある。しかし、冠の形式により配置される方角が定まるものではない。

頭髮などの表現で特徴的なのは、志免町四天王堂の剣を執る着甲神将像(南)のように総炎髪とし、豊かな頸髯をはやすもの(図10-2)であり、弓の馬場・茶山会館將軍地蔵尊の斧を執る着甲神将像(東南)も頸髯がある(図4-3)。ただし、持物や共通する特徴を有する尊像が配置される方角は一致しない。

持物としては、剣や棒状持物などの他に、斧(將軍地蔵尊・東南、首羅山遺跡〔西塔〕、同〔東塔〕、太宰府市個人蔵・南、加世田川畑個人宅・東南)、幡(首羅山遺跡〔東塔〕)、二又戟(西光密寺、海寺跡旧在〔その2〕、安満岳〔その1〕)、金剛杵かと思われるもの(志々伎神社中宮〔その1〕)、金剛鈴かと思われるもの(海寺跡旧在〔その2〕)が認められる。それぞれを持物とする神将像の配置は、方角が推定される場合においては、東ないし東南のようである。

毘沙門天が掲げる宝塔には、相輪部が低い宝篋印塔形のもの(志免町四天王堂〔図10-1〕)、弓の馬場・茶山会館將軍地蔵尊〔図4-2〕、総輪部が高い宝篋印塔形のもの(水元神社〔図1-3〕)があり、剥落してはいるがその痕跡から、志々伎神社沖津宮の毘沙門天像(図2-2)の宝塔も水元神社と同形式で、かつ、両手で掲げる持ち方も同じである。対して、火焰塚(図13)や宇美町個人蔵(図14)のように、いわゆる薩摩塔の形状を呈する宝塔を掲げる毘沙門天像も認められる。これは、石塔の大・小には関わらない。なお、いわ

ゆる「兜跋毘沙門天」の図像を呈する尊像が単独尊でなく、四天王の一尊として組み込まれている点は、朝鮮半島の作例と共通する²²⁾。

水元神社薩摩塔において、緊縛印かと思われる手印を結ぶ着甲神将像(図1-3)が西南に認められる。伝一条院跡旧在薩摩塔(南さつま市・坊津歴史資料センター輝津館)においては、西に配される可能性のある像が同じ印を結ぶと見られることから、手印の選択も、塔の大・小に関わらないことがうかがえる。緊縛印を結ぶ神将像は日本では希であり、中国では宋代以降、朝鮮半島では高麗時代以降に認められる。

さらには、志々伎神社中宮所在薩摩塔〔その1〕(長崎県平戸市平戸島)、虎御前供養塔(鹿児島県南九州市)、妙覚寺薩摩塔(佐賀県多久市)、西光密寺薩摩塔(佐賀県武雄市黒髪山)のように、宝塔を掲げる毘沙門天を含まない構成もある。神将形像群に毘沙門天が含まれない例も、朝鮮半島においては見出せるものである。

神将像以外では、西光密寺薩摩塔のように、金冠朝服を着し、両手は胸前で合掌する文官形の尊像(図6-2)、弓の馬場・茶山会館將軍地蔵尊薩摩塔においては、上半身裸形の力士形かと思われる尊像が構成されている。金冠朝服の文官形像は、中国の例に則せば、宋代以降の仏塔において表されるように、仏教の庇護者の象徴としての梁の皇帝像である可能性もあろう。

以上のことから、薩摩塔基壇部の諸像が、日本国内の情報ソースに拠るものではない可能性は高いであろう。しかもそのソースは決して一時期のものではない。毘沙門天が宝塔を掲げる手も、左手、右手、両手があるが、中国および朝鮮半島では、インド本来の右手が古様であるが、七世紀に入ると、中国式の左手優位の概念が採用された左手で宝塔を掲げる例も登場するようになる。両者は混在しながらその後も認められる。また、日本では平安時代後期以降に認められる宝塔を掲げ戟を執る毘沙門天像は、薩摩塔には認められな

い。また、宝塔、剣などの基本的な持物、金剛杵、宝珠など比較的古様な持物と、斧や幡など、九世紀以降の持物とが混在しており、新旧の図像を適宜採用した感がある。

四天王像の持物について、『陀羅尼集経』など、四軀の構成と各尊像の図像的特徴を明記する経軌はあるものの、四川省の石窟・石窟の浮彫、甘肅省の敦煌莫高窟や安西榆林窟の壁画、北京市昌平区の居庸関雲台の浮彫などのように、四軀一組で造立される四天王像は中国にそれほど多くなく、主要な尊像と重なり合って配置されるため、持物が明確でない場合も多い。そのため、四天王像の比較初期の図像把握には、方形石塔および方形舍利容器の四面に一尊ごとに配置される朝鮮半島の作例のような、必ず四軀一組の作例を用いることが有効であろう。朴亨國によれば、朝鮮半島の四天王の初期図像として、慶州感恩寺址西三層石塔出土金銅製舍利容器（六八二年）の四天王像のように、槍・宝珠・金剛杵・宝塔の四種類を持ち分けるものと、羅原里五層石塔出土舍利容器（八世紀前半）および石窟庵（七五〇年代）の四天王像のように、宝塔を持つ多聞天像の他の三尊はすべて剣を執るなど、持物が重複するものがある。また、九世紀に入ると弓矢や戟などの武器を執る像も登場し、尊像の「神將化」が進む²³。このように、韓国の四天王像は、特定の経軌によると考えるよりは、受容された図像を用いて比較的自由に構成することが可能であったと考えられる。このような実例を念頭に置くならば、薩摩塔の浮彫諸尊の選択のバリエーションは、制作段階において適宜行われた、取捨選択の自由さゆえであると考えたい。

なお、四天王像を舍利の守護尊として重視する特徴は、唐代の五台山信仰において隆盛し、その影響化において、中国華北、遼東地域、朝鮮半島において作例が認められる。その表現の一つが、朝鮮半島の石塔塔身部ないし基壇部に浮彫される四天王像であり、遼東地域の朝陽北塔出土銀製舍利筐（遼・一一世紀中頃）などである。

神將像の台座について、法隆寺四天王像のような瑞獸や鬼の例は、韓国では先の慶州感恩寺址西三層石塔出土金銅製舍利容器（六八二年）に認められ、四尊とも邪鬼を踏む例は石窟庵に、四尊とも岩座に立つ例は羅原里五層石塔（八世紀前半）や廉居和尚舍利塔（八四四年）に認められる。また、雲に乗る例、すなわち、虚空に神將像がいる（ないし、空を飛翔する）ことを示す例としては、清涼寺四天王石塔（九世紀初）など、さらに雲に準じ、自らの天衣を足下に踏むことで浮遊していることを表す例として、慶州南山僧燒谷三層石塔（九世紀前半）などがある。また、毘沙門天は地天女十二鬼を、他の三尊は雲座とする慶北大学校博物館蔵石造浮屠（一〇世紀後半）、毘沙門天は地天女、他の三尊は邪鬼を踏む報徳寺蔵伽伽寺址石灯（一一世紀）などもある。法興寺石造浮屠（一一世紀）や伝証覚大師凝窰塔（八九三年頃）のように、台座を表さないものもある。

一方、薩摩塔における神將像の台座には、雲、岩が認められ、小型の作例には、台座を伴わないものも多い。上記を踏まえれば、岩座に立つ神將像は須弥山上にあることを、雲に乗る神將像は飛来することを、台座を表さないのは虚空にあることを示すものと理解されよう。もちろん、塔の大きさと仕上げの丁寧さの加減により台座が省略された可能性もあるであろうが、台座の形状と有無により、その神將像が「どこににいるのか」・「どのような状況なのか」を推測することができそうである。すなわち、薩摩塔個々に想定されていた空間（仏の世界）を判断する根拠の一つとしても良いであろう。

なお、薩摩塔の神將形像は、鹿児島県霧島市の隼人塚五重石塔（三基）の四隅に立つ石造四天王像（平安時代後期）、霧島市の鹿児島神宮の石像四天王像（平安後期～鎌倉時代）、鹿児島県南さつま市の国分寺跡などに残る石造四天王立像（鎌倉時代）との類似を述べる声もあるが、図像的特徴や構成が薩摩塔の神將形像とは一致しないことから、関係性は薄いと考えている。

三、基壇部とその浮彫尊像からうかがえる薩摩塔とその周辺…六角平面の増加と神将形像の多様化

ところで、中国浙江省寧波市の天童寺・阿育王寺・保国寺所在の石造物に関し、辻俊和は次の作例を報告している²⁴。まず、「宋密庵傑禪師之塔」と題される無縫塔（宋代創建、崇禎十二年（一六三九）および雍正四年（一七二六）重修）である。本塔の塔身（梅園石製）は卵型とし、基壇部の下框は六角平面を呈する。現状において、その上に八角平面の中台が載り、塔身を支えているが、これは別材を組み合わせたものである。また、「宋岩光禪師之塔」の刻銘を伴う無縫塔（塔身は梅園石製、他は凝灰岩製）は、卵型の塔身を頂く基壇部は六角平面であるが、中台に彫刻はない。阿育王寺の石造物のうち、無縫塔の基壇部中台材、六角柱石などで六角平面の部材があるが、それらがいずれも明代であること²⁵、そして中台石の浮彫彫刻からも、以上の石塔における六角平面部材の彫刻は明代重修時のものである。日本国内最古とされる無縫塔形式の僧塔である泉涌寺開山塔（一三世紀中頃）において基壇部が八角であることから、無縫塔を薩摩塔の源泉とするならば、八角基壇であるはずであるが、現状において薩摩塔にそれはない。

なお、六角平面の塔について言及しておきたい。中国において、唐代までの仏塔・僧塔に認められるのは、法王寺塔（磚、河南省登封市）、香積寺塔（磚、陝西省西安市長安区）、雲居寺石塔（北京市房山区）などの方形と、鳩摩羅什塔（石、陝西省戸県）、唐磚塔（山西省五台県）などの八角形、泛舟禪師塔（磚、山西省運城市）、招福寺塔（磚、山西省運城市、八六六年）などの円形が大半である。対して、六角多層塔としては、五台山仏光寺（山西省五台県）の祖師塔（磚）や大徳方便和尚塔（磚）などがある。

宋代に入ると、仏塔・僧塔のおよそ八割が八角平面であり、その

他は方形で、天台山国清寺塔（浙江省天台県）のような六角多層塔は希な例であることが指摘されている²⁶。一方、六角七層の天寿寺塔（磚、安徽省広徳市、唐代創建、遼・崇寧四年（一一〇五）重修）、六角七層の東平房塔（磚、遼寧省朝陽県、金）、六角多層の石仏寺塔（磚、遼寧省瀋陽市瀋北新区、遼末〜金）、六角七層の妙峰寺西塔（磚、遼寧省錦州市綏中県、遼末）、六角七層の海城鉄塔（遼寧省海城市、金）、六角七層の塔湾塔（遼寧省遼陽県、遼末〜金）などがある。このように、遼および金代の塔は、その初期においては唐および渤海の影響を受け、朝陽北塔など四角もあるが、八角が最も多く、次第に遼代末期以降は六角も増加する。金代もこの形式を受け、八角と六角の塔塔が併存する。また、潭柘寺の海雲大宗師靈塔（北京市門頭溝区）、銀山塔林（北京市昌平区）のうち円通塔大禪師扇公靈塔（金・一三世紀）、故虚静禪師実公靈塔（金・大安元年（一一二〇）頃）などのいずれもが六角七層の塔塔であり、金代の仏塔よりも僧塔において、六角平面が増加する傾向が強い。そしてこの展開は、遼金代における墳墓形式の変遷ともパラレルな関係にある。初期の方形木槨を伴う墳墓形式から、八角や六角が出現することは指摘されている通りである²⁷。

遼寧地域の元代の仏塔・僧塔も、ラマ塔形式や漢式の樓閣式仏塔を除けば、遼金塔の形式を踏襲する例も少なくない。銀山塔林、戒台寺、潭柘寺などの塔林には、元代の六角多層塔塔がある。このような、東アジアにおける「六角塔」のムーブメントが、一二〜一四世紀にあつたことには念頭に置いておきたい。しかし同時に、例えば仏画中において、たとえ八角多層を意図した宝塔であっても、正面観で描かれると、それがしばしば六角形に見えることも多い。このような絵画資料からの誤認により六角平面が取り入れられた可能性と、また同時に、六地蔵経幢の流布との関連も視野に入れておきたい。

また一方で、仏教と道教の混交のなかで神将形像の姿のバリエー

ションが高まるという現象も、元代には顕著である。先に触れた大徳寺五百羅漢中に描かれる神将形像など、南宋仏画においてもそれは認められるのであるが、巖山寺壁画（山西省繁峙県、金）、水神廟明応王殿壁画（山西省洪洞県、元）、青龍寺壁画（山西省稷山県、元末〜明）などにおいてもそれは共通する傾向である。

そのような神将形像の見本帳とも言えるような存在が、『九天応元雷声普化天尊説玉枢宝經』（元）に描かれた、神将形像群である。『九天応元雷声普化天尊説玉枢宝經』は、元代に編集され、明さらに朝鮮王朝においても制作されるほど流布し、版本が刊行されている。巖山寺壁画においては、題箋状の書き込みが剥落しており場面は特定しがたいが、如来立像の左右に二比丘と二菩薩、さらに四天王を伴い、その頭上に光明を発する宝塔が空中（これら諸尊の頭上）にある。球形の塔身部と六角の屋蓋、頂上に宝珠型が確認できる。そしてこの四天王像（神将像四軀）は、兜（吹返付き）を被り、胸前で合掌し、斧を執る像、象頭冠を被り剣を執る像、獅子冠を被る像（持物不明）、兜（吹返付き）を被り二叉戟を執る像によって構成されている。このように、これらの神将形像の中には、薩摩塔と関連する特徴を有する尊像を、点的に見出すことができる。

薩摩塔の神将形像は、その構成も図像的特徴も、四天王について説く特定の経軌に依拠するものとは言えないであろう。新旧の図像的特徴が混在すること、台座の種類によって想定される空間が異なることなどからも、その場に依拠して、適宜取捨選択して構成していた可能性を提示したい。もちろんそれにあたって、近隣の既存の塔（すなわち、かつて効果を發揮し、「古典」と認識されていた塔）が手本になることもあろうが、例えば首羅山遺跡（東塔）と太宰府市個人蔵薩摩塔（九州歴史資料館保管）のように、また、火焰塚と宇美町個人蔵の薩摩塔のように、共通する彫り方が認められる作例の間にあってもまったく同じ尊像構成がないことから、「適宜取捨選択

する」というスタンスは、「既存の」ないし「経軌などに」定められた」手本を順守する意識より優先されていたのである。

そして、このような「適宜」という群像構成のまとめ方は、朝鮮半島の四仏、四天王、八部神将などに同様に看取できる特徴である²⁸。

むすびにかえて

以上のことから、次の点が想定されるであろう。まず、手本となる作例が、中国系工人により、作られた可能性がある（中国で作られたのか、日本国内で彼らが制作したのかについては、ここでは判断を保留したい）。恵光院燈籠堂に安置される石造十一面観音菩薩坐像（図15）については、宋の海商との結び付きが強い筈崎宮周辺の大陵系石造仏として、これまでに末吉武史や井形進によって指摘されているように²⁹、楕円形の面長の顔立ちが、南宋の彫刻に通じるとされる。

筆者もこれに異論はなく、さらに、この十一面観音像と同様に、顎先が尖り気味の卵型の顔立ち、ゆったりとしたやや幅広の衣皺ながらエッジの立ったその表現、対して、毛筋、持物や装身具などの細部に手抜きのない感覚は、志免町四天王堂の薩摩塔基壇部材の神将像と極めて通じる特徴である。すなわち、中国系工人の、しかも、石塔・石燈などの建造物以外の、単独の仏教尊像の造立経験を有する、その図像的見識を有する工人が関わった薩摩塔が、確かにある。福岡平野周辺では志免町四天王堂の薩摩塔基壇部材（方形）の他、弓の馬場・茶山会館將軍地藏尊の薩摩塔（六角基壇）、興徳寺の薩摩塔基壇部材（六角）であり、鹿児島県万之瀬川流域では水元神社の薩摩塔（六角基壇）、長崎県島嶼部においては平戸島の志々伎神社沖津宮の薩摩塔（六角基壇）、さらに宇久島の毘沙門寺の薩摩塔基壇部材（六角）など、比較的大型で（かつ六角平面）、浮彫の奥行きがあ

り、神将像の体軀に躍動感を伴う表現が看取できる。かつ、相好、持物や手印などの細部に誤認が少なく、仏教尊像に携った経験と見識がうかがえる。毘沙門天像においては、宝篋印塔型の宝塔を掲げ持つ。

次に、そのように、ある一定の地域における先例がある種の「古典」となり、周辺に類する作例を生み出していく。この「古典」とは、別稿において述べたとおり、いわゆる「瑞塔」であり、特定の付加価値をもつ霊験あらたかな、効力の強い塔との認識を獲得した塔が、「古典」すなわち「瑞塔」に準ずるものとして「手本」となり、そのかたちを模した塔の発生を促したという理解である³⁰。ここでは「特定の付加価値」、「霊験あらたか」とは、薩摩塔に関するこれまでの研究成果において挙げられているように、航海の安寧と海運の発展であろう。

このようにして、特定の地域における「古典」と認識された塔を模すという意識で、同形の塔が制作されていく。この過程において、韋駄天の宝棒が単に棒状持物と表現されるなどの簡略化、両手の位置は押さえながらも持物を省略して表す韋駄天や毘沙門天など、石造彫刻、しかも、石造物の浮彫ならではの技法が採用されていた。これは、おそらく仏教尊像を専門に制作する工人ではない石工が担当し、しかも細部の彫刻が難しい比較的小型の塔であったための技術上の工夫である。こうした省略・簡略のシステムは、朝鮮半島の石塔の浮彫尊像においても認められるものである。

そして、いわゆる薩摩塔形式の宝塔は「古典」との認識を獲得したからこそ、毘沙門天の掲げる宝塔に薩摩塔形式（すなわち、自らがいままに制作している塔の形式）が出現³¹して行ったのではないだろうか。なお、こうした地域において「古典」となる塔は、例えば「倉浦の宝塔」復元図³²のように、情報ソースは同じくしながらも、異なる表現を選択した宝塔もある。旧川内市久見崎町（倉浦）

に伝わる石塔で、復元図（図16）が示されている。高い双輪、木造建築を模した屋蓋石、球形の塔身部には仏龕を設け、ここが阿弥陀如来の宮殿であることを示すかのように、塔身部にも建築部材（柱や梁など）が浮彫されるようである。神将像などを表す基壇部中台はない。『川内市史』によれば、本塔は国内で造立されたものとする³³。

薩摩塔の機能について、「海路を護り日本へと安寧に導き、そして到着後は九州西側各地における、彼らにとって大切な場所に据えられて、そこにあり続けて聖なる力を発しつつ心の支えとなり、往來を護る役割については、基本的な機能として、広く共有しているものではないかと考えている」³⁴と井川進は総括する。これに異論はない。ただ、海路によってつながれる先は、寧波という限定された地域だけではなく、発端はそこからもたらされた情報にもとづく建立であったが、元の躍進によるユーラシア大陸の大変革により、さらに多様な文化的背景を持った多くの人々の価値観が投影され、その縮図であるかのような面白さを、いわゆる「薩摩塔」に感ぜずにはいられない。

付記

薩摩塔の調査にあたっては、九州歴史資料館・井形進氏、宇久島毘沙門寺・兼平徹成氏、公益財団法人松浦史料博物館・久家孝史氏、平戸市役文化観光商工部文化交流課・小松義博氏、南九州市教育委員会文化財課（ミュージアム知覧）・新地浩一郎氏、平戸市生月町博物館島の館・中園成生氏、南さつま市教育委員会生涯学習課・橋口亘氏、福岡県宇美町教育委員会社会教育課・松尾尚哉氏、薩摩川内市川内歴史資料館・吉本明弘氏、堺市博物館・渡邊博史氏（以上、五十音順。各氏の御所属先は二〇二二年度による）の多大なるご配慮とご協力を得た。ここに付して心より御礼申し上げます。本稿は、

科学研究費補助金基盤研究(B)(一般)(課題番号20H0120
9、研究代表者：金沢美術工芸大学・水野さや、研究分担者：武蔵野
美術大学・朴亨國)における成果の一部である。

註

- 1 高津孝・橋口巨による次の論考によれば、いわゆる「薩摩塔」の研究の端緒は、昭和三年に坊津薩摩塔(鹿児島県南さつま市、坊津歴史資料センター輝津館)の調査に遡ることができ、この時点ではまだ「薩摩塔」と呼ばれずに「特殊仏塔」などと称されていた。国内の石塔において、極めて特殊な形状・構成をしたものとして紹介され、昭和三六年一月二〇日の『毎日新聞』鹿児島版の記事において、斎藤彦松が鹿児島県内の「特殊仏塔」を「薩摩塔」と名付けたという説明がみられるのが、諸刊行物中での「薩摩塔」呼称の初見であるとされる。その後、一九九八年に至ると、薩摩塔は薩摩以外でも確認されることになったものの、現在も「薩摩塔」の呼称は広く認知されている通りである。高津孝・橋口巨「薩摩塔小考」、『南日本文化財研究』七号、二〇〇八年、二二～二三頁。堺市博物館の渡邊博史により、薩摩塔形式の石塔塔身部(仏龕内に如来坐像を表す)が堺区田湊西墓地において収集され、次の展示において報告されている。企画展「人とモノが行き交う中世堺―流通の考古学―」堺市博物館、会期：二〇二二年七月二二日～一〇月一〇日。
- 2 後述のように、井形進によれば如来形以外の尊格も比定されるが、筆者は極めて低い肉髻表現、円環で吊る袈裟の表現も、中国および朝鮮半島の作例には認められること、比較的小型で、凝灰岩や花崗岩などの石材においては、螺髪・白毫などが省略されることも多々あることから、如来形像と総じてよいのではないかと考えている。
- 3 いわゆる「薩摩塔」の研究史および現状については、次の論考などにまとめられている。
 - ・前掲註1高津孝・橋口巨「薩摩塔小考」
 - ・井形進「薩摩塔研究概観―新資料の紹介と共に―」、『古文化談叢』第六五号、二〇一一年七月
 - ・高津孝・橋口巨・大木公彦「薩摩塔研究(続)―その現状と問題点―」、『鹿大史学』五九号、二〇一二年二月
 - ・高津孝・橋口巨・大木公彦「謎の石塔「薩摩塔」」、『高津孝編・小島毅監修『東アジア海域に漕ぎ出す3くらしがつなぐ寧波と日本』東京大学出版会、二〇一三年五月
- 4 井形進「薩摩塔の研究序説」、『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究―薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察―』平成二六年度～二九年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、九州歴史資料館、二〇一八年三月、九～二三頁。なお、本著には「薩摩塔関係文献目録稿」(二〇～二三頁)が附されている。
- 5 次の論考などが挙げられる。
 - ・松田朝由「鹿児島県の薩摩塔」、『南日本文化財研究』七号、二〇〇八年五月
 - ・前掲註1高津孝・橋口巨「薩摩塔小考」
 - ・江上智恵「薩摩塔の編年試論―考古学の見地から―」、『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究』所収、一〇一～一二三頁
- 6 次の論考などが挙げられる。
 - ・橋口巨・高津孝・大木公彦「大応国師供養塔(福岡市興徳寺)四天王像彫出部材の発見と薩摩塔」、『南日本文化財研究』一二号、二〇一一年七月
 - ・井形進「薩摩塔の時空と背景」、『デアレテ』二八号、九州芸術学会、二〇一二年三月
 - ・井形進「薩摩川辺の水元神社の薩摩塔」、『九州歴史資料館研究論集』四五号、二〇二〇年三月
- 7 主に次の論考による。
 - ・大木公彦・古澤明・高津孝・橋口巨「薩摩塔石材と中国寧波産の梅園石との岩石学的分析による対比」、『鹿児島大学理学部紀要』第四二号、二〇〇九年一月
 - ・高津孝・橋口巨・大木公彦「薩摩塔研究―中国産石材による中国系石造物という視点から―」、『鹿大史学』第五七号別冊、二〇一〇年二月
 - ・大木公彦・古澤明・高津孝・橋口巨「日本における薩摩塔・礎石の石材と中国寧波産石材の岩石学的特徴に関する一考察」、『鹿児島大学理学部紀要』第四三号、二〇一〇年二月
 - ・大木公彦「薩摩塔石材は中国寧波産梅園石」、『鹿児島大学総合研究博物館 News Letter』一八号、二〇一一年三月
 - ・桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠里「九州発見中国製石塔の基礎的調査―所謂「薩摩塔」と「梅園石」製石塔について―」、『福岡大学考古学研究室調査報告第一〇冊「福岡大学考古資料集成」四、福岡大学人文学部考古学研究室、二〇一一年三月
- 8 大木公彦・古澤明・高津孝・橋口巨・市村高男「薩摩塔石材と中国寧波市の下部白亜系方岩組地層との対比」、『鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学)』四六号、二〇一三年二月
薩摩塔は、宋風獅子などの渡来石造物と同じく安置される場合が多いことが指摘されている。そうした観点から、薩摩塔に関連する中国系石造物に関する言及として、主に次の論考がある。

- ・井形進「首羅山遺跡の宋風獅子と薩摩塔」、『首羅山遺跡・福岡平野周縁の山岳寺院』久山町教育委員会、二〇〇八年二月
- ・橋口亘「南さつま市加世田益山の八幡神社現存の宋風獅子・中世万之瀬川下流域にもたらされた中国系石獅子」、『南日本文化財研究』一八、二〇一三年六月
- ・井形進「首羅山とその周辺の渡来彫刻」、『首羅山をとりまく聖なる山々―糟屋・鞍手の山岳霊場遺跡―』九州山岳霊場遺跡研究会、二〇一三年八月
- ・橋口亘「南さつま市加世田川畑現存の薩摩塔」、『南日本文化財研究』一九号、二〇一三年一〇月
- ・橋口亘「南九州市川辺町宮の飯倉神社現存の宋風獅子」、『南日本文化財研究』一九号、二〇一三年一〇月
- ・上田耕「海上交易の産物薩摩塔・宋風獅子―中世前期の石塔と関連遺跡を訪ねる」、『考古学ジャーナル』六七二号、ニューサイエンス社、二〇一五年七月
- ・橋口亘・松田朝由「南さつま市金峰町宮崎字持軀松の上宮寺跡の中国製石仏（一）―万之瀬川下流域の上宮寺跡で発見された宋風石仏と周辺の宗教遺物・遺構―」、『南日本文化財研究』二五号、二〇一五年七月
- ・井形進「長門三隅の熊野権現社の宋風獅子」、『九州歴史資料館研究論集』四二号、二〇一七年三月
- ・井形進「宋風獅子の時空」、『首羅山遺跡の薩摩塔と宋風獅子』、「志々伎神社の薩摩塔と宋風獅子」、いずれも前掲註4「九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究―薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかるとの考察」に所収
- また、宮崎宮など、海南の中心地では石造物のバリエーションが多く、周辺に行くほど、薩摩塔と宋風獅子の組み合わせに集約されることも、次の井形進論考において指摘されている。
- ・井形進「薩摩塔とその周辺」、『首羅山遺跡発掘調査報告書』久山町教育委員会、二〇一二年三月
- ・井形進「九州の中国渡来の石造物の位相―福岡平野を中心とする考察―」、『九州に偏在する大陸系彫刻の研究―薩摩塔を中心とする石造物を主として―』平成二九年度（令和二年度）科学研究費補助金（基盤研究C）研究成果報告書、九州歴史資料館、二〇二二年三月
- 9 主に次の論考に指摘がある。
- ・高津孝・橋口亘「謎の石塔、薩摩塔」、『順風往来―薩摩をめぐる東アジア海域交流史―』南さつま市坊津歴史資料センター・輝津館、二〇一〇年九月
- ・前掲註7 桃崎祐輔・山内亮平・阿部悠里「九州発見中国製石塔の基礎的調査」
- ・前掲註4 高津孝・橋口亘・大木公彦「薩摩塔研究（続）」
- 前掲註6 井形進「薩摩塔の時空と背景」、同「薩摩川辺の水元神社の薩摩塔」、井形進「薩摩塔の時空・異形の石塔をさぐる」花乱社、二〇一二年二月および
- 10
- 11 び井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」（前掲註8「九州に偏在する大陸系彫刻の研究」所収、四三―四八頁）など。
- 前掲註10 井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」、四六―四八頁。本書において井形は、薩摩塔には納入品や納骨の設備がないことから、墓塔や供養塔とは考えにくく、木造の須弥壇や屋根の部材が彫刻で表現されていることから、木造の堂宇を尊像もろとも要約して石で再現した「ある種の宗教施設」との見解を示している（四六頁）。対して高津孝・橋口亘・大木公彦は、前掲註4 高津孝・橋口亘・大木公彦「謎の石塔「薩摩塔」」において、「造立意図については、前述した霊鷲寺石塔が祖先に対する供養塔であったという点から、薩摩塔も供養塔であった可能性が考えられる。ただし、日本に将来された後、時代の経過のなかでその性格が変化した可能性は否定しない」（一九五頁）とする。
- 12 主に次の論考が挙げられる。
- ・橋口亘「中世前期の薩摩国南部の対外交渉史をめぐる考古新資料―南さつま市芝原遺跡出土薩摩塔・同市加世田益山八幡神社現存の宋風獅子・三島村硫黄島発見の中国陶磁器を中心に―」、『鹿児島考古』第四三三号、二〇一三年七月
- ・橋口亘・松田朝由「南さつま市加世田小湊「当房通」の薩摩塔―万之瀬川旧河口付近「唐房」比定地の中国系石塔―」、『南日本文化財研究』二〇号、二〇一三年二月
- ・橋口亘「薩摩南部の中世考古資料をめぐる諸問題―薩摩塔・宋風獅子・貿易陶磁・清水摩崖仏群・硫黄交易―」、『鹿児島考古』第四四号、二〇一四年七月
- ・井形進「山の神仏と海―九州北部と造形遺品に見る―」、『山岳修験』第五四号、二〇一四年九月
- ・橋口亘「南薩摩の薩摩塔をめぐる諸問題―中世前期南薩摩への中国系石造物の流入と硫黄貿易―」、『歴史と地理』第六八五号、山川出版社、二〇一五年六月
- 13 国内の中世石造物の概要については、次を資料収集の入口とした。坂詰秀一監修「石造文化財調査研究所編集『考古調査ハンドブック5 石造文化財への招待』ニューサイエンス社、二〇一一年。
- 14 井出誠之輔は、大徳寺所蔵語釈羅漢図中の「卵塔湧出図」（周季常系）について、次の様に薩摩塔との関わりを指摘する。「壺状を呈する卵塔は、釈迦の分骨における舍利容器を想起させる。その中央には、説法印の釈迦如来が坐し、上部には傘形を戴き、最上部に宝珠を乗せて飾りをつけているらしい。こうした形式は、北部九州および鹿児島地方に点在し、近年、その南宋明州との関わりが注目されている石造薩摩塔の形状とも近い。銭弘俶塔から発見された版本宝篋印陀羅尼經に表される塔とも基本的に近い形状をしている」（『大徳寺伝来五百羅漢図』東京文化財研究所・奈良国立博物館、二〇一四年五月、九

- 15 一頁。
井形進「薩摩塔の周辺にかかる小考―東アジアの石造物の中で―」（前掲註8『九州に偏在する大陸系彫刻の研究』所収、五九〜七四）において引用されている劉恒武による論考（劉恒武「浙江の窠塔波式石塔と九州の薩摩塔」、『シンポジウム「中世の福岡平野から見る東アジア―首羅山と造形遺品を中心に―」資料集』九州歴史資料館・久山町、二〇一六年七月）による。
- 16 井形進「志々伎神社の薩摩塔と宋風獅子」、前掲註4『九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究』所収、九二〜九四頁。
- 17 前掲註10 井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」、四二頁。
- 18 前掲註10 井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」、四二頁。
- 19 前掲註10 井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」、四二頁〜四三頁。
- 20 現時点において本石塔を実見できていないため、浮彫尊像の配置・有無・像容は次の橋口論考によった。橋口亘「南さつま市加世田川畑現存の薩摩塔」、『南日本文化財研究』一九、二〇一三年一〇月。
- 21 大日如来の手印とその変容については、次の論著など、朴亨國による一連の研究に詳しい。朴亨國『ヴァイローチャナ仏の画像学的研究』法蔵館、二〇〇一年二月。
- 22 韓国の毘沙門天については、陸載和の次の論考に詳しい。陸載和「韓国における「いわゆる兜跋毘沙門天」の図像について」、『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査』平成一六年度〜一八年度科学研究費補助金・基盤研究（B）成果報告書、二〇〇八年三月、四〇五〜四〇九頁。
- 23 もちろん韓国の四天王像について取り上げる論考は多数あるが、統一新羅から高麗時代までの作例を網羅し、その展開の様相を示したものとして、朴亨國による次の論考に触れておきたい。朴亨國「韓国の四天王像の図像について」、前掲註21『韓国の浮彫形態の仏教集合尊像（四仏・五大明王・四天王・八部衆）に関する総合調査』、三九五〜四〇三頁。また、石塔基壇部の尊像の神将化については、次の拙稿において触れている。「三 四天王・八部神将―石造物に付随する仏像（2）」および「四 八部衆―石造物に付随する仏像（3）」、『韓国仏像史』名古屋大学出版会、二〇一六年、一九七〜二〇九頁および二一〇〜二二〇頁。「（2）八部神将の流れ」、『八部衆像の成立と展開』中央公論美術出版、二〇一七年、三〇一〜三〇七頁。
- 24 辻俊和「天童寺・阿育王寺・保国寺」、山川均編『寧波と宋風石造文化』東アジア海域草書10、汲古書院、二〇一二年五月、一三九〜一四四頁。
- 25 前掲註24 辻俊和「天童寺・阿育王寺・保国寺」、一五六〜一五八頁。
- 26 張寶馭『中国仏塔史』科学出版社、二〇〇六年九月、一〇二頁。
- 27 内蒙古博物院編・鄭承燕「遼代貴族喪葬制度研究」（文物出版社、二〇一四年八月、七一〜七五頁）、田立坤「朝陽的隋唐紀年墓葬」（遼寧省文物考古研究所・日本奈良文化財研究所編著『朝陽隋唐墓葬發現与研究』科学出版社、二〇一二年六月、一一五〜一四四頁）、向井祐介「朝陽北塔考―仏塔と墓制からみた遼代の地域―」（遼寧省調査報告書2006『京都大学大学院文学研究科21世紀COEプログラム「グローバル時代の多元人文学の拠点形成」、二〇〇六年三月、一九〇〜一九五頁）など。
- 28 韓国において四仏の構成は、葉師如来（東）と阿弥陀如来（西）は確定しているものの、南北の如来像は変動し、重複も見られる。すなわち、東西軸以外は、その石塔の四仏の建立目的に応じて、適宜、組み合わせられる自由さがあった。また、八角ないし六角多層形の遼金塔においては、四仏の場合、金剛界四仏として方角が確定している東・西・南・北の面にはその尊像を配置するが、他の四面については、碑形裝飾を表すもの（興城白塔峪塔）、六角平面の塔においては四仏の他には力士像を表すもの（東平房塔）など、選択に幅がある。主に次の論考による。
- 29 ・末吉武史「福岡・恵光院燈籠堂の石造十一面観音像―南宋彫刻の可能性と図像の検討―」、『福岡市博物館研究紀要』第二二号、二〇一二年二月
・井形進「宮崎宮周の中国系渡来石造仏―恵光院の作例を中心に―」、『九州歴史資料館研究論集』四四号、二〇一九年三月
- 30 拙稿「北京天寧寺塔と慈壽寺塔に見る「古典」意識とその意図」、『金沢美術工芸大学紀要』六一、二〇一七年、一八六（九）〜一九二（二）。
- 31 なお、この薩摩塔形式の宝塔について井形進は、劉恒武の見解を引用し、寧波の阿育王寺舍利殿の浮彫四天王像（元）において、「天王像の一軀が、薩摩塔に類似した塔を手にしていると言われる」と触れている。前掲註15 井形進「薩摩塔の周辺にかかる小考」、七〇頁。
- 32 川内郷土史編さん委員会編『川内市史』下巻、鹿児島県川内市、一九八〇年三月、二四一頁。
- 33 前掲註32『川内市史』下巻、九七三〜九七四頁。
- 34 前掲註10 井形進「薩摩塔の尊像と彫刻表現」、四七〜四八頁。なお、井形は塔身の僧形が四洲大師であり、また、薩摩塔のいくつの特徴を東海の三神山、特に蓬萊山との関わりのおかげで解釈できる可能性を示唆している。「海商たちが親しんだ、仏教をはじめとするさまざまな信仰が流れ込んでいる、聖堂の一種だと推察される薩摩塔は、寺院がその立地によって外護者によって意味や性格を変えるように、具体的個別の役割はそれぞれではないかと考えている」と、限段階での自身の薩摩塔研究を総括し、薩摩塔の性格を特徴付けている（同、五二頁）。

（みずの・さや 美術工芸研究所／東洋美術史）

（二〇二三年一月八日 受理）



图 1-1 水元神社薩摩塔 鹿兒島県南九州市

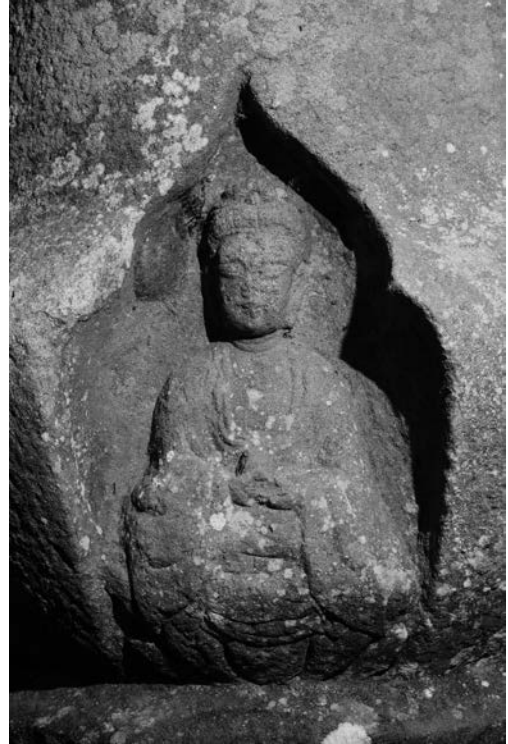


图 1-2 同 塔身部 如来坐像



图 1-3 同 基壇部D面 着甲神将形像 (部分)

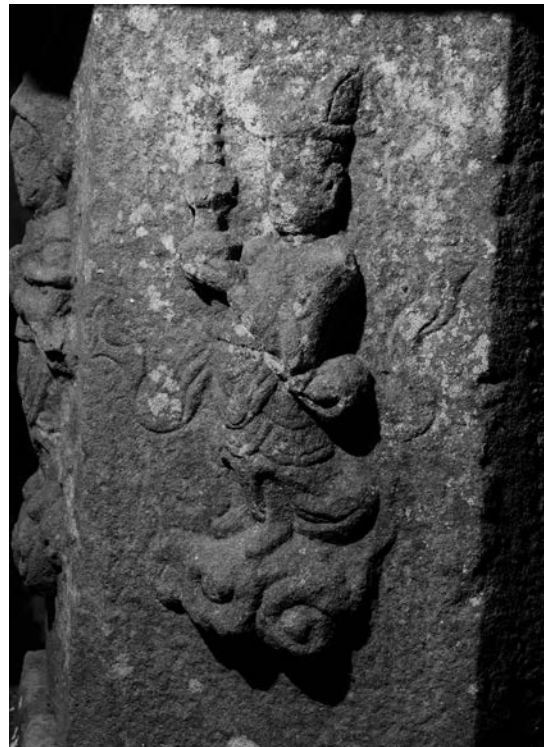


图 1-4 同 基壇部F面 着甲神将形像



図2-1 志々伎神社沖都宮薩摩塔
長崎県平戸市平戸島



図2-2 同 基壇部D面 着甲神将形像



図3-1 興徳寺薩摩塔 基壇部材
福岡県福岡市西区姪の浜



図3-2 同 D面 着甲神将形像



図4-1 弓の馬場・茶山会館
將軍地藏尊薩摩塔
福岡県福岡市城南区



図4-2 同 基壇部D面 着甲神将形像



図4-3 同 基壇部F面 着甲神将形像



図5 安満岳山頂付近薩摩塔
〔その1〕上・〔その2〕下
長崎県平戸市平戸島



図6-1 西光密寺薩摩塔
佐賀県武雄市黒髪山



図6-2 同 基壇部B面 文官形像



図7-1 首羅山遺跡 薩摩塔〔西塔〕
福岡県久山町



図8 首羅山遺跡 薩摩塔〔東塔〕
福岡県久山町



図9 平戸市生月町博物館・島の館
薩摩塔 長崎県平戸市生月島



図7-2 同 塔身 如来坐像



同7-3 同 基壇部A面 着甲神将形像



図10-1 四天王堂安置薩摩塔 基壇部材C面・B面 着甲神将形像
福岡県志免町



図10-2 同 A面 着甲神将形像



図11-1 海寺跡旧在薩摩塔〔その1〕
長崎県平戸市田平町里田原
歴史民俗資料館



図11-2 同 基壇部C面
飛雲文



図12-2 同 基壇部D面
飛雲文



図12-1 志々伎神社中宮 薩摩塔 基壇部材〔その2〕
長崎県平戸市平戸島



図13 火焰塚薩摩塔 基壇部材C面 神将形像



図14 宇美町個人蔵薩摩塔 基壇部C面 神将形像 (部分)



図15 恵光院燈籠堂 石造十一面観音菩薩坐像
南宋 (福岡県福岡市東区馬出)
(井形進『九州に偏在する大陸系彫刻の研究』2021年、13頁より転載)

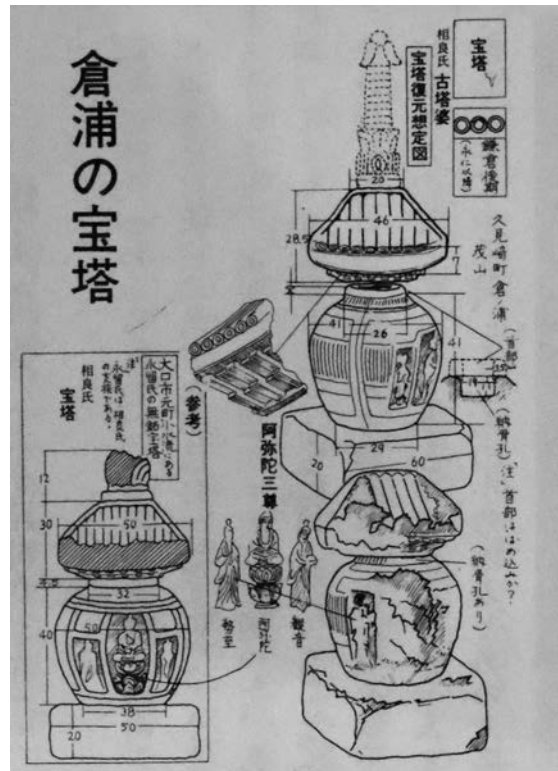


図16 「倉浦の宝塔」復元図
(川内郷土史編さん委員会編『川内市史』下巻、
鹿児島県川内市、1980年、241頁より転載)

【表1】「薩摩塔」六角基壇部中台における浮彫尊像

所蔵先 (所在地)	基壇部中台石各面の浮彫尊像 (A面:塔身に仏龕を設ける面 [正面])						備考
	A	B	C	D	E	F	
水元神社 (鹿児島県南九州市 伝運朝寺址旧在) 図1-1	着甲神将形 兜(吹返・羽根飾付 き)を被る。 両手は胸前で合 掌、宝棒を水平に 挟み持つ。 韋駄天	着甲神将形 冠(三弁)を被る。 右手胸前に置く (キク印か?)。 左手は左腰外で剣 を執り、剣先を右 下方に向ける。	なし	着甲神将形 冠(円筒形・正面中 央に円形飾付き) を被る。 両手は胸前に置い て緊縛印を結ぶ。 図1-3	なし	着甲神将形 冠(三弁)を被る。 両手を胸前に挙げ て宝塔(宝篋印塔 型、双輪部完備) を掲げる。 毘沙門天 図1-4	塔身部と基壇部は別材のため、本来の構成 とは面がずれている可能性もある。 塔身の如来坐像は、左上上に定印を結び、 掌上に乗壺(あるいは舍利容器)のような筒 状持物を乗せる。通肩式に大衣をまとい、 右肩に覆肩衣がかかる。肉髻珠を表す。 神将像はいずれも雲座上に乗る。 後方斜側面(C・E)には彫刻なし。
	東北	東南	南	西南	西北	北	
西光密寺 (佐賀県武雄市黒髪 山) 図6-1	着甲神将形 宝冠(円筒形)を被 る。両手ともに腹 前に置き棒状持物 の上端(剣柄?)を 支え、下端を地に 付ける。	文官形 金冠朝服を着す。 両手は胸前で笏を 執る。 図6-2	なし	着甲神将形 Aと同形 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端(剣柄?)を執り、 下端を地に付ける 。	なし	着甲神将形 右手は右胸前で二 叉戟を執る。 左手は左腰に当て る。	塔身の如来坐像は、定印を結ぶ。通肩式に 大衣をまとい、襟はV字に合わせる。 A面は幅11.5cm、B面10.5cm、C・D・F面は12. 0cmで六面のうち最大、E面11.5cm。後方斜 側面(C・E)には彫刻なし。 宝塔を掲げる毘沙門天を含まない。
	南	西南	西北	北	東北	東南	
弓の馬場・茶山会館 将軍地蔵尊 (福岡県福岡市城南 区) 図4-1	着甲神将形 上半身欠。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。	力士形? 頭部、剥落により 不明。 上半身裸形か?(腹 筋の隆起と臍の凹 みあり)	なし	着甲神将形 冠(円筒形)を被 る。 左手欠。 右手で宝塔(宝篋 印塔型)を掲げる。 毘沙門天 図4-2	なし	着甲神将形 頭髪は不明。兜を 被るか? 頸鬘を表す。 左手欠。 右手は胸前で左上 に向けて笏を執 る。図4-3	B面の幅は10.5cmで六面のうち最大、B・D・ F面10.0cm、C面10.2cm、E面9.5cm。 尊像を表さないC・F面が後方となるか。 神将像は岩座上に立つ。
	南	西南	西北	北	東北	東南	
加世田川畑個人宅 (鹿児島県南さつま 市)	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 左上上・右下下で ともに腹前に置 く。持物とその有 無は不明。	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 胸前で合掌し、宝 棒を水平に掲げ る。 韋駄天	なし	着甲神将形 冠(三弁)を被る。 左手は右腰に当て 腰帯を握る。 右手は左肩に挙げ て宝塔を掲げる 毘沙門天	なし	着甲神将形 両手ともに腹前に 置き長柄の笏を支 え、柄の下端を地 に付ける。	本塔は実見できておらず、尊像の配置・像 容・有無は橋口2013による。
	南	西南	西北	北	東北	東南	

・着甲神将形：上半身・下半身ともに着甲する神将形像。胸甲、肩甲、籠手、腰甲、脛当など一式を着する。
 ・神将像の配置される方向は、毘沙門天であることが明らかな尊像が含まれる場合、この面を北とし、他面の配置も当てはめた。

橋口2013：橋口亘「南さつま市加世田川畑現存の薩摩塔」、『南日本文化財研究』19、2013年10月

【表2】「薩摩塔」六角基壇部材の浮彫尊像

所蔵先 (所在地)	基壇部材の浮彫尊像						備考
	A	B	C	D	E	F	
志々伎神社沖津宮 (長崎県平戸市平戸 島) 図2-1	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 両手は胸前で合掌 する。持物不明。 韋駄天か?	着甲神将形 剥落により詳細不 明。 右手は胸前に置 く。 左手は左腰で剣を 執るか?	なし	着甲神将形 冠(円筒形)を被 る。 両手を左肩前に挙 げて宝塔(宝篋印 塔型)を掲げる。 毘沙門天 図2-2	なし	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 右手は胸前、左手 は左腰の辺りに置 くが、剥落により 詳細不明。	一辺の幅約32cm。 彫刻のないC・E面は後方斜側面、D面が背 面となるか(Aが正面か)。 雲座上に乗る。 松浦史料博物館蔵「弘安七年(1284)注進状 写」に記載の「多宝塔一基」にあたと想定 されている(久家2012)
	南	西南	西北	北	東北	東南	
毘沙門寺 (長崎県佐世保市宇 久島)	なし	なし	着甲神将形 頭髪は炎髪とする か? 右手は腹前で剣を 執り、剣先を右下 に向ける。 左手は左腰脇に置 く。	着甲神将形 右手を挙げて宝塔 (宝篋印塔型?)を 掲げ持つ。 左手は左腰に当て る。 毘沙門天	着甲神将形 頭体ともに正面を 向く。 両手ともに腹前に 置き剣柄を押さ え、剣先を地に付 ける。	着甲神将形 右手は右腰に当て る。 左手は左腰脇に置 き剣(?)を執り、 剣先を上に向け る。	表面に摩滅が及ぶ。 毘沙門天を表すD面は幅16.0cmで六面のう ち最大。E面は幅14.8cmで六面のうち最小。 B・C・F面15.5cm、A面15.2cm。 神将像はいずれも雲座上に乗るか。 尊像を表さないA・B面が背面となるか。
	南	西南	西北	北	東北	東南	
興徳寺 (福岡県福岡市西区 姪の浜) 図3-1	不明(土中埋没)	着甲神将形 頭部欠。 右手は右腰で剣を 執り、剣先を左下 に向ける。 左手欠。	着甲神将形 頭部・上半身欠。 右手は右腰に当て る。 左手欠。	着甲神将形 冠を被る。 右手は左胸前に置 く。 左手は左肩に挙げ て宝塔(欠矢に より形状不明)を 掲げる。 毘沙門天 図3-2	不明(土中埋没)	不明(土中埋没)	現状で三面のみ確認できる。他面は土に埋 まっており、現状において確認不可。 C面の幅20cm。 神将像は雲座上に立つ。欠損が及ぶ。
	南	西南	西北	北	東北	東南	

所蔵先 (所在地)	基壇部材の浮彫尊像						備 考
	A	B	C	D	E	F	
志々伎神社中宮 その1 (長崎県平戸市平戸島)	着甲神将形 頭部不明。 右手欠。 左手は胸前で持物 (金剛杵か?)を執る。 持国天か?	着甲神将形 兜を被る。 両手は胸前で合掌 する。 持物はなし。 韋駄天(持物省略) か?	なし	着甲神将形 総炎髪とする。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。	なし	着甲神将形 頭部欠。 胸前に左上上・右 手下に置いて持物 (剣か?)を執る。 剣先は右下に向け る。	一辺の幅約14.5cm。 彫刻のないC・E面は後方斜側面、D面が背 面となるか(Aが正面か)。 宝塔を掲げる毘沙門天を含まない。刻銘あ り:「大寶□/真高為現世安穩/後生善處 奉納/志自波峯/元□三□□八月□/敬 白」(は行変え)。年号は「元亨三年 (1323)」の可能性が呈されている(井形 2018)。
	東ないし東南?	東南ないし南?	西南?	西ないし西北?	北?	東北ないし東?	
加世田小湊個人蔵 (鹿児島県南さつま市)	着甲神将形 左手は胸前に置き 持物(剣か?)を執 るか? 右手は右腰あたり に置くか?	着甲神将形 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付けるか?	なし	着甲神将形 長丈の裙を着す。 右手は右腰に置く か。 左手は左肩上に挙 げるか?	なし	着甲神将形 両手ともに腹前に 置き持物(摩滅に より不明)の上端 を支え、柄の下端 を地に付ける。	本塔は実見できておらず、尊像の配置・像 容・有無は橋口・松田2013掲載図版による。 頭部は欠損し、像全体に摩滅が及 び、不明な点が多いようである。 宝塔を掲げる毘沙門天を含まないし、 D面が持物省略形で表された毘沙門天像 か?
龍福寺跡 (長崎県大村市)	着甲神将形 右手は右腰に置 く。 左手は腹前で剣を 執る。	着甲神将形 両手ともに腹前に 置き棒状持物(剣) の上端を支え、下 端を地に付ける。	欠・不明	欠・不明	欠・不明	欠・不明	六面のうち二面(A・B)のみ。 A面の幅20.0cm、B面18.5cm。 石材の欠失により、頭部を欠く。岩座上に 立つ。

- ・着甲神将形：上半身・下半身ともに着甲する神将形像。胸甲、肩甲、籠手、腰甲、脛当など一式を着する。
- ・神将形：下半身に腰甲ないし脛当を着する。武器を取るため神将形と称する。

久家2012：久家孝史「志自岐家覚抜書」所収の弘安七年注進状写、『南日本文化財研究』13、2012年3月
井形2018：井形進「九州に偏在する中国系彫刻についての基礎的研究－薩摩塔と宋風獅子の基準設定にかかる考察」平成26年度～29年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、九州歴史資料館、2018年3月、92～94頁
橋口・松田2013：橋口亘・松田朝由「南さつま市加世田小湊「当房通」の薩摩塔－万之瀬川旧河口付近「唐房」比定地の中国系石塔－、『南日本文化財研究』20、2013年12月

【表3】「薩摩塔」方形基壇部中台における浮彫尊像

所蔵先 (所在地)	基壇部中台石各面の浮彫尊像(A面：塔身に仏龕を設ける面〔正面〕)						備 考
	A	B	C	D	E	F	
首羅山遺跡 西塔 (福岡県久山町) 図7-1	着甲神将形 獅子冠を被る。 海老籠手・海老脛 当とする。 右手は右腰に置 いて長柄付きの轡を 執る。 左手は左腰に当 てる。 図7-3	着甲神将形 頭髪は左右に梳き 分け流す。 海老脛当とする。 両手ともに腹前 において斧の柄を執 る。	着甲神将形 冠(円筒形・三弁) を被る。 海老籠手・海老脛 当とする。 右手は右腰に当 てる。 左手は左肩上に挙 げて宝塔(宝篋印 塔型、脚付)を掲 げる。 毘沙門天	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 海老籠手とする。 裾の長い裙を着す。 両手ともに腹前 に置き剣柄を支え、 剣先を地に付ける。			塔身部と基壇部は別材のため、本来の構成 とは面がずれている可能性もある。 塔身の如来坐像は、いわゆる大足系左拳印 (12世紀から認められる)を結ぶ。 神将像はいずれも雲座に乗る。 鱗袖の先を結ぶ。
	南	西	北	東			
首羅山遺跡 東塔 (福岡県久山町) 図8	着甲神将形 両手ともに腹前 に置き斧を支え、柄 の下端を地に付け る。 左手は欠。	着甲神将形 海老籠手とする。 右手は右腰に当 てる。 左手は左肩上に挙 げて宝塔(摩滅に より形状不明)を 掲げる。 毘沙門天	着甲神将形 両手ともに腹前 に置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。	着甲神将形 右手は腹前に置 く。持物の有無不 明。 左手欠。			塔身部と基壇部は別材のため、本来の構成 とは面がずれている可能性もある。 塔身の如来坐像は、胸部以下欠失により印 相不明。 神将像は、石材の破損により、いずれも頭 部を欠く。いずれも雲座に乗る。鱗袖の 先端を結ぶ。
	西	北	東	南			
太宰府市個人蔵 (九州歴史資料館)	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 鱗袖の先端を結ぶ。 胸前で合掌するか (剥落により手先 不明)。持物は剥 落しないもとから なしか? 韋駄天(持物省略) か?	着甲神将形 獅子冠を被る。 両手ともに腹前 に置き斧を支え、柄 の下端を地に付け る。	着甲神将形 地髪を正面で左右 に梳き分ける。 鱗袖の先端を結ぶ。 両手ともに腹前 に置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。	着甲神将形 冠(三弁)を被る。 海老籠手を着け る。 右手は右腰に当 て腰帯を握る。 左手は左肩上に挙 げて宝塔(摩滅に より形状不明)を 掲げる。 毘沙門天			塔身の仏坐像は、肉髻は低く、段差を設け ない。通肩式に知恵をまとう。右肩に覆肩 衣をかける。胸前に置いて両手ともに掌を 立てるような痕跡があるため、合掌印か安 慰印の可能性はあるか? 神将像はいずれも雲座上に立つ。 B面の幅は21.0cm、C面23.3cm、A・D面は材 の欠損により不明。
	東	南	西	北			

所 蔵 先 (所在地)	基壇部中台石各面の浮彫尊像 (A面:塔身に仏龕を設ける面(正面))						備 考
	A	B	C	D	E	F	
宇美町個人蔵 (福岡県宇美町)	神将形 大袖衣を右前打合せに着す。 右手は右腰で剣を執り、剣先を左足外側に降ろして地に付ける。 左手は左胸前で持物(短刀?あるいは刀の鞘?)を執るか?	神将形 兜(吹返付き)を被る。 大袖衣を右前打合せに着す。 両手ともに腹前に置き剣柄を支え、剣先を地に付ける。	神将形 大袖衣を右前打合せに着す。 左手は左肩に挙げて宝塔(薩摩塔型)を掲げる。 毘沙門天 図14	神将形 大袖衣を右前打合せに着す。 兜(吹返付き)を被る。 胸前で合掌し、宝棒を水平に掲げる。 韋駄天			本塔は塔身部材が残存するが、別材のため、本来の構成とは面がずれている可能性もある。 塔身の如来坐像は、大衣に吊紐と環を表す。胸前で手を組むか? 肉髻は低く、段差がほばない。螺髪を彫出する。 A面は幅16.0cmで四面のうち最大、B面15.0cm、C面は幅15.2cm、D面は14.5cm、 神将像の台座は表さない。
海寺跡旧在 その1 (長崎県平戸市田平町里田原歴史民俗資料館) 図11-1	着甲神将形 右手は腹前に置いて棒状持物の上端を支える。 左手欠。	着甲神将形 右手は右腰に置いて左下に向けて剣を執る。 左手欠。	雲(雲尾を下方になびかせる)。 図11-2	着甲神将形 欠失により不明			現状において、基壇部中台中頃で上下に割れている。欠損により不詳部分が多い。 塔身の如来坐像は、通肩式に大衣をまとう。欠損により手印不明。
平戸市生月島博物館・島の館 (長崎県平戸市生月島) 図9	着甲神将形 兜(吹返・羽根飾付き)を被る。 両手は胸前で合掌する。棒状持物は表さないか。 韋駄天(持物省略)か?	着甲神将形 右手は右腰に、左手は左肩に挙げる。持物は不明。 左手の位置から毘沙門天(持物省略)か?	着甲神将形 両手の位置は不明だが、両脚の間に棒状持物が認められる。持物下端を地に付ける。	着甲神将形 右手は腹前に置き棒状持物(槍か?)を執る。持物上端が右頭側に位置するか? 左手は左胸前に置く。			全体的に摩滅が及ぶ。 塔身の如来坐像は、左手は胸前に置く。右手は不明。 A面は幅11.5cmで四面のうち最大、B面10.7cm、C・D面は11.0cmである。鱗袖の先端を結ぶ。 神将像の台座は表さない。
伝宝光院跡旧在 (鹿児島県南九州市・ミュージアム知覧)	? 服制など不明(大袖衣か?)。 坐勢不明。 両手は胸前に置いて左手・右手下に重ねる。	神将形 甲制・冠(円筒形?)など不明。 左膝を立てて坐す。口角を強く凹ませる。 右手は右太腿に当てる。 左手は左肩に挙げて宝塔(摩滅により形状不明)を掲げる。 毘沙門天	神将形 甲制・服制不明(大袖衣か?)。 兜(吹返付き)を被るか? 坐制不明。 開口するか? 未完成か? 手印・持物不明。 (両手ともに胸前に置くか?)	神将形 甲制・冠など不明。 坐勢不明。 両手ともに胸前に置いて棒状持物の上端を支え、下端を地に付ける。			塔身の如来坐像は、欠損により不明。 神将像は、いずれも坐像とする。鱗袖・大袖が確認できる。いずれの像も台座なし。
虎御前供養塔 (鹿児島県南九州市)	着甲神将形 兜(吹返付き)を被る。 胸前で合掌し、宝棒を水平に掲げる。 韋駄天	着甲神将形 両手ともに胸前に置き棒状持物の上端を支え、下端を地に付ける。	着甲神将形 Bと同形。	着甲神将形 宝冠(三弁?)を被る。 持物はBと同じ。			塔身部仏龕の如来坐像は定印(左手下)か? 神将像を表す各面の幅は約16cm。台座は表さない。 宝塔を掲げる多開天を含まない。
伝一条院跡旧在 (鹿児島県南さつま市・坊津歴史資料センター・輝津館)	着甲神将形 冠(円筒形)を被る。 海老籠手とする。 右手は左腹前に置く。 左手は左肩に挙げて宝塔?(火炎宝珠にも見える)を掲げる。 毘沙門天?	着甲神将形 総炎髪とする。両手ともに腹前に置き剣柄を支え、剣先を地に付ける。	着甲神将形 兜(吹返付き)を被る。 胸前で合掌し、宝棒を水平に掲げる。 韋駄天	着甲神将形 髪髪を炎髪とするか? 両手は胸前に置いて緊縛印を結ぶ。			塔身部仏龕の如来坐像は、左手下・右手上とし、包み込むように持物(薬壺あるいは舍利容器)を掌上に乗せる。通肩式に大衣をまとい、右肩に覆肩衣がかかる。肉髻珠を表す。 神将像を表す各面の幅は15.2~15.7cm。いずれの像も台座なし。
安満岳 その1 (長崎県平戸市平戸島) 図5	着甲神将形 兜(吹返付き)を被る。 両手は胸前で合掌、宝棒を水平に挟み持つ。 韋駄天	着甲神将形 右手は腹前に置いて剣を執る。剣先は左肩の上に位置する。 左手は腹前に置く(手印不明)。	着甲神将形 冠(円筒形・三弁?)を被る。 右手は右胸前に置く。 左手は左胸前に置いて二又戟を執る。	着甲神将形 冠(三弁?)を被る。 両手ともに腹前に置き棒状持物の上端を支え、下端を地に付ける。			現状、本塔は安満岳山頂付近白山神社の後方にある薩摩塔部材(その2)の上に乗せられている。 塔身の如来坐像、手印は不明。 A面の幅13.7cm、B面は13.8cmで四面のうち最大、C・D面は13.0cm。 宝塔を掲げる毘沙門天を含まない。
妙覚寺 (佐賀県多久市)	着甲神将形 両手ともに腹前に置き棒状持物の上端を支え、下端を地に付ける。	着甲神将形 両手は胸前に置いて合掌か? 持物なし。 韋駄天の崩れか?	着甲神将形 両手ともに腹前に置く。持物なし。	着甲神将形 両手ともに腹前に置く。持物なし。			塔身仏龕の如来坐像は、表面全体に摩滅が及び、手印不明。 神将形像を表す面は、A面は幅10.7cmで四面のうち最小、B面10.9cm、C面11.8cm、D面11.0cm。 いずれも台座を表さない。全体的に摩滅が及び、 宝塔を掲げる多開天を含まない。

・着甲神将形:上半身・下半身ともに着甲する神将形像。胸甲、肩甲、籠手、腰甲、脛当など一式を着する。
・神将像の配置される方向は、毘沙門天であることが明らかでない尊像が含まれる場合、この面を北とし、他面の配置も当てはめた。

【表4】「薩摩塔」方形基壇部材の浮彫尊像

所蔵先 (所在地)	基壇部中台石各面の浮彫尊像 (A面:塔身に仏龕を設ける面 [正面])						備考
	A	B	C	D	E	F	
四天王堂 (福岡県志免町) 図10-1	着甲神将形 総炎髪とする。 鬚髯を表す。 左手は胸前に置き 指を捻じる。 右手は右腰で剣を 執り、剣先を左下 に向ける。図10-2	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 胸前で合掌し、宝 棒を水平に掲げる。 韋駄天	着甲神将形 頭頂に髻を結び、 冠(三弁)を被る。 右手は胸前に置く。 左手は左肩に挙げ て宝塔(宝篋印塔 型)掲げる。 毘沙門天	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。			A・C面の幅20.2cm、B・D面は20.5cm。 神将像は台座を欠す。 鯨袖の先を結ぶ。
	南	西	北	東			
火焰塚 (福岡県福岡市東区 志賀島)	神将形 大袖衣を左前打合 せに着す。 頭頂に髻を結び、 鬚髪を炎髪とする。 胸前で合掌し、宝 棒を水平に掲げる。 韋駄天	神将形 頭頂に髻を結び、 鬚髪を炎髪とする (ないしは、兜(吹 返付き)を被る か?)。 両手ともに腹前に 置き剣柄を支え、 剣先を地に付け る。	神将形 大袖衣を右前打合 せに着す。 頭部不明(摩滅)。 右手は右腰に当 てる。 左手は左肩に挙げ て宝塔(薩摩塔型) 掲げる。 毘沙門天 図13	神将形 大袖衣を右前打合 せに着す。 頭髪不明(摩滅)。 両手ともに腹前に 置き剣柄を支え、 剣先は左下を向 く。			一辺はいずれも15.5cm。 神将像の台座は表さない。
	南	西	北	東			
参考 恵光院方形多層石塔 (福岡県福岡市東区 馬出)	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に着ける。	着甲神将形 冠(三山)を被る。 右手は胸前、左手 はその直ぐ左下に 置く。右しないし 左下に向けて剣を 執る姿の持物省略 か?	着甲神将形 宝冠(円筒形)を被 る。 海老籠手とする。 右手は右腰に当 てる。 左手は左肩に挙げ て宝塔(摩滅に より不明、宝篋印 塔型を意識か)を 掲げる。 毘沙門天	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 るか、もしくは頭 頂に髻を結うか? 鬚髪を炎髪とする か? 胸前で合掌する。 持物はないよう である。 韋駄天(持物省略) か?			方形石塔部材であり、現状において本部材 が第一層、第二層・三層には、それぞれ四 面に四仏を表す塔身部材が載る。 神将像の台座は不明。いずれも摩滅・欠損 が及ぶ。
	南	西	北	東			
志々伎神社中宮 そ の2 (長崎県平戸市平戸 島) 図12-1	着甲神将形 冠(円筒形)を被る。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 両手は胸前で合掌 する。持物はなし。 韋駄天(持物省略) か?	着甲神将形 冠(円筒形・三弁) を被る。 左手は左肩に挙げ て宝塔(宝篋印塔 型)掲げる。 右手は右胸前に置 く。 毘沙門天	雲(雲尾を下方に なびかせる)。 図12-2			一辺の幅は四面ともに約13.5cm。 神将像の台座は表さない。鯨袖の先端を結 ぶ。 海寺跡旧田はその1に準ずれば、雲を表すD 面が背面か?
	南	西	北	東			
海寺跡旧在 その2 (長崎県平戸市田平 町 里田原歴史民俗 資料館)	着甲神将形 吹返付きの兜を被 る。両手ともに胸 前に置き、合掌し て棒状持物(宝 棒?)を水平に掲げ る。 韋駄天	着甲神将形 右手は胸前で持物 (金剛鈴?)を執る。 左手は不明。	着甲神将形 冠(三弁)を被る。 右手は胸前におい て掌を横向きに立 てる。左手は胸前 で二又戟を執る。	着甲神将形 丈の長い腰甲を着 ける。両手とも腹 前に置き、棒状持 物の上端を支え、 下端を地に付ける。			四面ともに材の幅は18.0cm。 宝塔を掲げる毘沙門天を含まない。 台座は表さない。鯨袖の先端を結ぶ。
	南	西	北	東			
安満岳 その2 (長崎県平戸市平戸 島)	欠・不明	着甲神将形 獅子冠を被る。 両手は腹前に置く。 持物不明ないしな しか?	神将形か? 服制・甲制不明。 雲座に乗る。 左手を上挙げる。 毘沙門天(持物省 略)か?	着甲神将形 兜(吹返付き)を被 る。 両手ともに腹前に 置き棒状持物の上 端を支え、下端を 地に付ける。			現状において、安満岳山頂付近白山神社後 方にあり、薩摩塔その1の下に組み入れら れている。 一辺の幅は四面ともに約27cm。
	南?	西?	北?	東?			

- ・着甲神将形：上半身・下半身ともに着甲する神将形像。胸甲、肩甲、籠手、腰甲、脛当など一式を着する。
- ・神将形：下半身に腰甲ないし脛当を着する。武器を取るため神将形と称する。
- ・松浦資料博物館(長崎県平戸市)の入口付近の庚申講の御堂前に、薩摩塔の部材(基壇部中台以下の一部)が安置されている。四面の神将像は脚部などを残すのみで、彫刻の大半は摩滅している状態である。そのうち、現状正面の神将は韋駄天か?
- ・天福寺(福岡県福岡市早良区)出土の薩摩塔とみられる部材(基壇中台の一部)二材が、福岡県埋蔵文化財センターに収蔵されている。うち一材には、神将立像-?のみが残る。現存するのは両膝以下であり、尊容は不明である。
- ・宮崎宮恵光院の方形多層石塔については、薩摩塔に関係する作例として取り上げられることがある(井形2021など)。神将像の図像比較のため、本表にも所収した。